

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Mariya Kojima

1982年に、福井県坂井市三国町の老舗「いとや提灯店」の三人きょうだいの末っ子として生まれる。25歳の時に父の畑峰雄氏に弟子入りし、職人の道を歩み始める。



提灯 (ちようちん)

室町時代以前に中国から伝来したといわれる物が安土桃山時代から江戸時代の初期にかけて折り畳めるように改良され普及した。高いところに使われる高張り提灯、寸胴型の小田原提灯、御用提灯として知られる弓張り提灯などの種類がある。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

**MOVIE** WebやTVなどでお楽しみいただけます。

**Web版**

パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉



**TV番組**

ディスカバリーチャンネル (CS)

**冠番組**

「アットホーム presents 明日への扉」放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00

**ビジョン**

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

**NEW!!**

最新号のご案内

No.077 / 石見神楽 奉納神楽の舞台裏  
~若者たちがつなぐ伝統の舞~

## 提灯職人

小島 まりや氏

祭を愛するふるさとの心を照らす。

江戸時代中期から明治時代にかけて、北前船の交易で栄えた福井県坂井市三国町。古い街並みを残す港町では、北陸三天祭の一つであり250年以上の歴史を持つ三国祭をはじめ、さまざまな祭礼が今も大切にされている。それらの行事に欠かせない小道具が提灯。町のあちこちにももまれる灯りが、祭の風情を一層引き立てる。

家の外に置かれる提灯は、自然と傷む。そのため、「いとや提灯店」では古い提灯の張替えも行っている。それは提灯に託された、祭を愛する人々の思いを未来に引き継ぐ重要な仕事だ。張替えとはいえ骨組みから全て新たにやり直すため、作業的には提灯を一からつくるのと変わらない。

張合せは経験の浅い者には特に難しいという。一人前になるには、ひたすら手を動かして、体に技を覚えこませるしかない。

**今後の抱負は？**

小島「もっと多くの人に見てもらって、提灯の良さを感じてほしい。そして昔のように、提灯の灯りで町の雰囲気をもっと情緒溢れるものにしていきたいですね」

ふるさとの心を照らすのは、職人が精魂込めてつくる提灯。その灯りが決して消えることはないだろう。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

小島「兄と姉が別の仕事に就いたため、家業を絶やしてはならないと思っただけです。やる以上は、実家を日本一の提灯屋といわれるぐらいの店にしたいと、心に決めて」

細かい骨組みは、たくさん竹ひごを木型に組んでつくる。一口に提灯といっても豊富な種類があるため、工房には形や大きさもさまざまな木型が置いてある。木型さえあればどんな提灯でもつくることのできるという、それはまさに職人にとっての財産なのだ。

慎重に骨組みを終えると、提灯づくりで最も難しい和紙張りの工程。和紙を、中指と薬指で押さえながら人差し指で骨組みに沿って伸ばしていく。微妙な力加減が求められる作業を繰り返して、骨組み全体に和紙を張り合わせていくのだが、曲線部分の

**MOVIE MORE!!**  
懸命に提灯づくりに挑む姿を動画でご紹介しています。ぜひご覧ください。

※2011年9月取材。掲載内容は取材当時のものです。